

國學院大學文学部 ガイドブック

史学科

君と探求したい歴史がある



KOKUGAKUIN U.N.I.V.

國學院大學

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學史学科の学び

大学で歴史を学ぶ意味を考え、史資料にもとづく
実証的な歴史学を身につける

史学科代表 谷口 康浩 教授（先史考古学）



さまざまな情報を簡単に検索できるインターネットは現代生活にますますなくてはならないものになっています。ただし、氾濫する情報のなかには真偽不明のものやデマ、悪意的なフェイクニュースも多いので注意が必要です。便利さと危険が隣り合わせですから、騙されたり踊らされたりしないために正しい情報を見極められる目をもたなくてはなりません。これから大学で歴史を学ぼうとする皆さんになぜこのようなことから書き始めるのかというと、歴史に関する情報にもじつはこのような危険がつきまとうからです。

このごろ、歴史的事実とフィクションの区別があいまいになってきたように感じています。テレビの大河ドラマや歴史小説の影響力が大きいといえます。歴史のロマンを楽しむのは個人の自由ですが、フィクションと事実が混同されてはなりません。先ごろ天皇・皇后両陛下がご即位を奉告するために奈良県橿原市にある「神武天皇陵」を参拝されたとニュースで短く報道されました。神武天皇陵は勤皇思想が広がった幕末の文久年間に官武一和の政策の一つとして江戸幕府の経費でつくられたもので真の古墳ではないことを、ほとんどの一般市民は知りません。このニュースを聞いて神武天皇が実在したと思った人もいたかもしれません。

もっとも危険なのは、虚構の歴史が政治的に利用されるときです。間違った情報や偏った歴史観を押し付けられて扇動されないように、歴史の真実を正しく見極められる教養をもたねばなりません。大学で歴史を学ぶ意味とは、過去の事実を史資料に基づいて実証的に究明できる資質と、虚偽の歴史を批判できる力を身につけることです。

最後のセンター試験となった今年、日本史Bの史料問題に津田左右吉の『古事記及び日本書紀の新研究』

(1919年)から一節が引用されました。歴史家なら史料批判をおこなうのは現在では当たり前ですが、津田は記紀の記述の信ぴょう性に言及したばかりに不敬として攻撃され、この本を含めて4冊の著書は発禁となり、早大教授の職も失いました。100年前のこの著作を出題者がなぜ引用したのか真意は知りませんが、私には受験生へのメッセージが感じられました。ただ単に受験勉強のために歴史上の出来事や人名を暗記するのではなく、歴史を学ぶ意味を真剣に考えてほしい。そんな意図がこめられていたのではないのでしょうか。

歴史を自由に研究することができない国に日本は再びなつてはなりません。また、グローバル化した現代社会では、国際的な歴史感覚と多面的な歴史の見方が求められます。大学で歴史を学ぶ皆さんには、専門知識を積むだけでなく、歴史の問題に主体的に関わる姿勢をもってもらいたいと思います。つまり問題意識です。問題意識があつてこそ、歴史の学びが個人の楽しみをこえて市民社会に役立つ意義深いものとなります。國學院大學の史学科はそういう学生を待っています。

國學院大學史学科には、「日本史学」「外国史学」「考古学」「地域文化と景観」の4つの特色あるコースがあります。文献史料(文書)にもとづく歴史学はもちろん、考古資料や絵画・古地図などの物質資料・非文字資料をもちいたさまざまな歴史の研究分野を学ぶことができます。90以上の専門教育科目があり280以上の授業を毎年開講しています。全国の大学のなかでももっとも充実した歴史教育のカリキュラムといつてよいでしょう。さらに深く学問を究めたい人には史学専攻5コースを設置した大学院もあり、研究者や教員を育成しています。このような充実した学習環境のなかで、私たちと一緒に歴史を深く学びませんか。



史学科の学びとその特色

学ぶ分野を明確にした4コースと学ぶ目的で選べる2つのプログラム
全方位的に歴史を学べる充実したカリキュラム！

【4つのコースと2つのプログラム】



Q. コースとその内容について教えてください。

A. 史学科には「日本史学コース」「外国史学コース」「考古学コース」「地域文化と景観コース」の4つのコースがあります。「日本史学コース」では、古代から近現代までの各時代の史実とその意義について研究します。「外国史学コース」では、朝鮮半島から北アフリカまでの各地域とヨーロッパからアメリカまでの各地域の歴史を、語学の修得などを基礎として明らかにしていきます。「考古学コース」では、遺跡や出土遺物などの物質資料から過去の人類文化とその歴史を読み解きます。「地域文化と景観コース」では、絵図や古地図、地名や景観、地域の信仰や芸能など、風土と歴史のなかで培われた文化を多方面から究明します。コースの選択は、2年次の初めに行います。

Q. “プログラム”について教えてください。

A. 4つのコースとは別に、史学科には2つのプログラムがあります。S-プログラムとP-プログラムです。大学にはさまざまな目的で多くの学生が入学してきます。どのような職業に就きたいかなどの多様な学びの要求に対応するため、2つのプログラムが存在します。プログラムの選択は、2年次の初めに行います。

Q. S-プログラムとは何ですか？

A. S-プログラムとは Standard Career Programの略称です。歴史を幅広く学んで人生に活かし、将来は公務員や一般企業への就職を考えている学生のためのプログラムです。歴史学の専門科目の他に、語学や法学・経済学など社会人の素養となる科目を多く履修します。教員免許・学芸員資格の修得は可能です。

Q. P-プログラムとは何ですか？

A. P-プログラムとは Professional Career Programの略称です。歴史学の必修科目や選択必修科目から多く履修し、将来教員や学芸員などの専門職、大学院への進学を考えている学生のためのプログラムです。そのため教員免許や学芸員資格の修得を勧めます。



Q. 史学科の教員について教えてください。

A. 史学科には現在、19名の専任教員がいます。日本史学コース8名、外国史学コース4名、考古学コース2名、地域文化と景観コース2名の構成です。博物館学課程を担当する教員1名、教職課程を担当する教員2名も史学科に所属しています。多彩な専攻分野の教員から専門性の高い教育・指導を受けることができます。専任教員のほかに、例年90名前後の兼任講師がさまざまな授業を受け持っており、非常に幅広い選択肢の中からいろいろな歴史の授業を受けることができます。

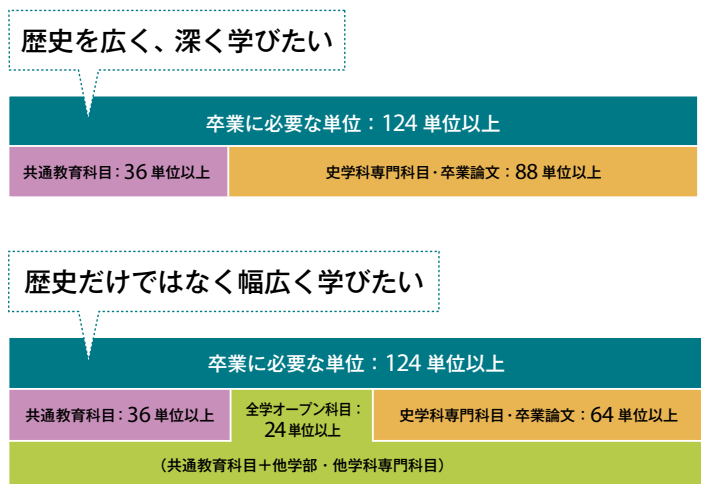
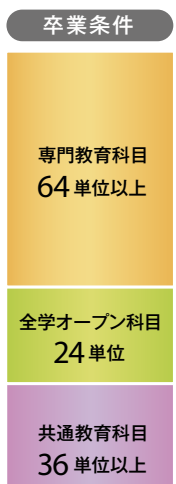
Q. どのような授業がおこなわれていますか？

A. 史学科では90以上の専門科目を開講しています。開講講座数は280以上にも及び、全国の大学の中でも最も充実した内容といえるでしょう。それらは授業の形式からみると「講義科目」「演習科目」「実習科目」に分けられます。「講義科目」は教員がさまざまなテーマに即して自身の見解を学生に講義する形式の授業で、歴史研究の最前線が学べます。一方「演習科目」は史料や論文を学生が調べてきて、それを発表するゼミ形式の授業で、20名前後の少人数でおこないます。演習では学生の自主性・主体性が大切になります。「実習科目」は考古学コースと地域文化と景観コースに設けられており、フィールド調査を通して実践的に学ぶ授業です。このほかに「卒業論文」があります。



Q. 大学の授業の取り方について教えてください。

A. 大学の授業は1コマ90分です。前期または後期の半期開講の科目と、通年開講の科目があり、それぞれ履修単位（半期は1～2単位、通年は4単位）が異なります。國學院大学のカリキュラムは、大きく「共通教育科目」と「専門教育科目」からなっています。卒業するためには最低124単位の単位取得が必要で、共通教育科目を少なくとも36単位以上（第二外国語も含む）、専門教育科目を少なくとも64単位以上履修しなくてはなりません。残りの24単位は、史学科の専門科目から選んでもよいし、すべての学部・学科から提供された「全学オープン科目」の中から取ることもできます。自分自身の関心や目的、キャリアデザインに合わせて、授業の取り方も自分で決められます。



○歴史学を広く深く学びたい人は、史学科の専門教育科目88単位、共通教育科目36単位を取って卒業することができます。教職の資格取得に有利な取り方もできます。

○歴史だけでなく幅広くいろいろ学びたい人は、専門教育科目64単位と共通教育科目36単位のほかに、全学オープン科目を活用して他学部・他学科の専門科目から好きな授業を取ればよいでしょう。知的好奇心を満たす副専攻プログラムもあります。



史学科の学びとその特色

Q. 4年間の学びについて教えてください。

A. 史学科のカリキュラムは、最初の導入教育から総仕上げの卒業論文まで、段階的に専門性を深めて進むように設計されています。ここでは必修科目を中心に説明します。

1年次	各コースの教員が歴史をみる眼差し（歴史の見方）や研究の取り組み方法（研究姿勢）などについてリレー式に講義する「史学入門Ⅰ・Ⅱ」、史・資料の探し方、レポートの書き方、発表の仕方などの初歩的な手法を学ぶ「史学導入演習Ⅰ」、専門研究のための基礎を学ぶ「史学導入演習Ⅱ」などを履修します。歴史学のさまざまな分野、それぞれの研究方法について学びます。
2年次	必修科目として「史学基礎演習Ⅰ」と「史学基礎演習Ⅱ」を履修します。自分が専攻する分野を中心に、史・資料を読み解くための技術や語学力を身につけるための実践的な訓練と発表をおこなっていきます。
3年次	卒業論文指導を希望する教員が担当する「史学展開演習Ⅰ・Ⅱ」を履修し、演習発表や卒業論文の準備報告を通して、より専門的に歴史研究を学んでいきます。卒業論文の指導が始まり、自分の研究テーマや研究計画を立て、10月には第一次題目を提出します。
4年次	指導教員の「史学応用演習Ⅰ・Ⅱ」で、卒業論文の中間発表などをおこない、史学科での学びの集大成に向けて進みます。7月には卒業論文の第二次題目を提出し、12月までに完成させて提出します。



Q. S-プログラムとP-プログラムの専門科目の取り方について教えてください

A. 専門科目には、基幹科目・コース別基幹科目・総合科目・展開科目・関連科目の5種類があります。両プログラムとも卒業論文を含む必修科目である基幹科目の28単位を履修する必要があります。コース別基幹科目については、S-プログラムでは各コースからそれぞれ6単位ずつを含む8単位以上、P-プログラムでは単一コースからの12単位を含む16単位以上を履修します。総合科目からは、各コース8単位以上を履修します。展開科目・関連科目については、S-プログラムでは展開科目・関連科目から合計20単位以上を履修し、P-プログラムでは展開科目・関連科目から合計12単位以上を履修します。関連科目には社会人の素養となる科目や、教員免許修得のための選択科目などが多くありますので、自分の志望に合わせて選択することができます。

Q. どのような資格が取得できますか？

A. 所定の科目を履修して単位を取得することにより、次の資格を取得することができます。ただし、各免許・資格とも所定の課程費の納入が必要です。

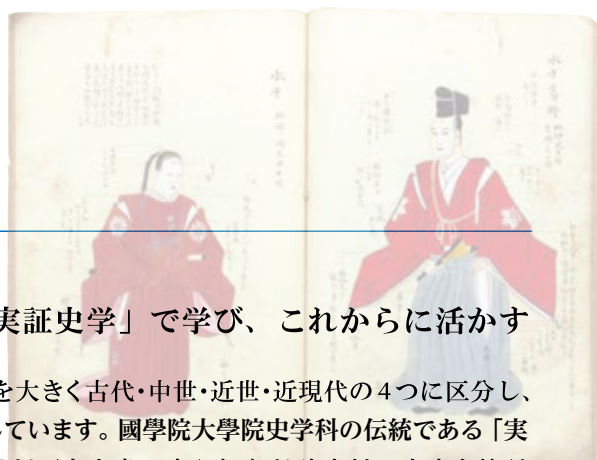
- 教職免許 中学校一種「社会」、高等学校一種「地理歴史」、高等学校一種「公民」（副免許）
- 学芸員 ○図書館司書・学校図書館司書教諭 ○考古調査士資格（2級）

Q. 卒業生の進路や就職状況は？

A. 経済学などの実学に比べて史学専攻は就職に不利といわれることがありますが、卒業生の就職状況は実学系の学部と大きく変わらず、さまざまな職種の一般企業に就職する人が最も多くなっています。史料やデータの収集力・分析力、それに基づく客観的な判断、歴史的思考の力は、さまざまな職種に活かされる重要な資質になるでしょう。教員や学芸員を目指して資格を取得する人の割合が高く、さらに大学院に進学して専門職や研究職を目指す人が比較的多いのも、史学科の傾向となっています。



史料にあたり、史実を考える 日本の歴史に新しい1ページを加える



■ 概要

古代から近現代まで、
我々の生きてきた道を「実証史学」で学び、これからの活かす

日本史学コースでは、日本史を大きく古代・中世・近世・近現代の4つに区分し、それぞれ2人の専任教員が担当しています。國學院大學院史学科の伝統である「実証史学」、すなわち厳密な史料批判（古文書・古記録など諸史料の内容を検討すること）を基礎に、各時代・分野の史実やその意義を研究します。

日本の社会・文化の成り立ちを明らかにして、現代社会とのつながりを考え、これから訪れる未来をひらく。

まさに時間を越えた四次元の「歴史的瞬間」を研究の材料として、論理的思考力や情報分析能力を高め、世界で活躍できる人材を育てていきたいと考えています。

■ 主な授業

● 史料講読Ⅰ・Ⅱ

(佐藤長門教授・比企貴之兼任講師・
高見澤美紀兼任講師・内山京子兼任講師)

歴史研究を進めるためには、歴史資料（史料）を正確に理解するための読解力が不可欠です。漢文調の文章や草書体（いわゆるくずし字）で書かれた史料を読む力が必要となるのはもちろんですが、史料の様式・形式、作成された背景など、その性格を詳しく知る必要もあります。日本古代史・中世史・近世史・近現代史の時代ごとに開かれるこの講義では、それぞれの時代の史料の特徴を学びながら、参加者全員で史料を読解していくことで、史料の読解力を養います。

● 有職故実Ⅰ・Ⅱ

(近藤好和兼任講師・佐多芳彦兼任講師)

厳格な身分制が確立されていた前近代の日本社会を理解するために、とても有効な学問が「有職故実」です。有職故実とは、公家社会や武家社会に属する者たちが日常的に必要とした知識の総称で、儀式・儀礼、服装、道具、政務の遂行や文書の形式など、実に多様な内容を含みます。Ⅰでは武家社会の儀礼、特に武器・武具について、Ⅱでは公家社会の儀礼、特に装束について中心的に扱っています。

● 史料管理・保存論Ⅰ・Ⅱ

(岩橋清美准教授)

國學院大學が所蔵している江戸時代の古文書の原本等を使用して授業を行ないます。江戸時代は大量の古文書が作成された時代で、この分析なしに研究は難しいのですが、その読解は困難です。この授業で少しでも近世古文書に関する知見を深めて、江戸時代の研究に役立ててほしいと思います。

● 史学専門講義

テーマ：「日韓交流の歴史」
(山崎雅稔准教授)

歴史認識をめぐる政治的対立が続く日本と韓国。その傍で歴史家は過去を乗り越えるための対話を続けてきました。講義では、自身が携わってきた対話の試みをふまえて、韓国の前方後円墳、倭寇、豊臣秀吉の朝鮮出兵、通信使、日韓併合、歴史問題、韓流といったテーマを取り上げながら、歴史対話の可能性を探ります。



■ 教員紹介 (氏名 専門分野 / 主な研究テーマ)

教授 佐藤長門 Sato Nagato	日本古代史 / 古代王権・国家の権力構造論	教授 吉岡 孝 Yoshioka Takashi	日本近世史 / 江戸幕府論・幕末史・地域社会史
准教授 山崎雅稔 Yamasaki Masatoshi	日本古代史 / 朝鮮古代史 / 日韓関係史・東アジア交流史	准教授 岩橋清美 Iwahashi Kiyomi	日本近世史 / 社会経済史・文化史・地域史
教授 高橋秀樹 Takahashi Hideki	日本中世史 / 院政～鎌倉期の政治史・社会史・家族史、史料論	准教授 柴田紳一 Shibata Shinichi	日本近現代史 / 日本近・現代の政治史・軍事史
教授 矢部健太郎 Yabe Kentaro	日本中世史 / 室町・戦国・織豊期の政治史・制度史・公武関係史	准教授 手塚雄太 Tezuka Yuta	日本近現代史 / 日本近現代の政治史・地域史

教員からメッセージ

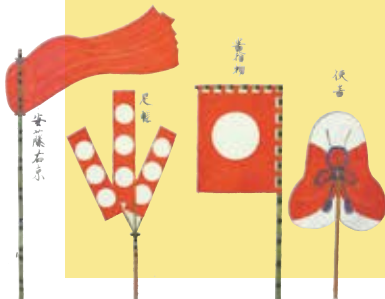


矢部健太郎 教授

大学の4年間にこそできる、
気力・体力も培う研究

私は、國學院大学の学生時代、剣道部に所属していました。日々の厳しい稽古に励みながら、専門の日本史学に加えて教職課程や博物館学芸員課程も選択していたため、とても慌ただしい毎日でした。しかし、あの苦しい日々は、いまの自分の支えとなっています。研究の時間をすべて剣道に充てていれば、もう少し強い剣士になれたかも知れない。しかし、剣道の時間をすべて研究に充てていたとして、もっとマシな研究ができていたかと言えば、そうは思いません。剣道で培った気力・体力は、私が研究する上で不可欠なものだからです。ですから、今も剣道を続けています。何かに取り組みようとする時、大事なものは「集中力」ではないでしょうか。人は誰も平等に、1日は24時間しか与えられていない。その時間をいかに有効に使えるか。

大学の4年間は、子ども(高校生)から大人(社会人)へ成長するための大切な時間でもあります。学問を大切にしながらも、学問以外にもさまざまな経験を積み、充実した学生生活にしてください。



重なりあう、
いくつもの歴史を
縦横無尽に行き来する…
わくわくが深さを増していく

■ 概要

歴史が長く、地域も広大。
語学力をつけながら、強い問題意識をもとう

外国史学コースは、大きく分けて、東洋史を学ぶコースと西洋史を学ぶコースとの2つがあります。前者はさらに、中国や朝鮮などの「漢字文化圏」の歴史を研究するものと、東南アジア・インド・中東などの「横文字文化圏」の歴史を研究するものとに分かれます。一方、後者は、一口に「西洋」といっても、関心のある地域はどこなのか、いつごろの時代を勉強したいのかにより、さまざまな研究方法があります。

いずれにせよ、外国史学コースが対象とする地域は非常に広大で、時間の幅は長く、そこに居住する民族は星の数ほどおり、宗教も言語も複雑にからみ合っています。その歴史のすべてを4年間で学ぶのは、残念ながら、不可能です。外国史を学ぼうという皆さんに期待するのは、何を勉強したいのか強い問題意識を持ち、自主的に行動し、授業に積極的に参加することです。また、外国史を研究する上では、語学力は必須です。国際社会で活躍する人材が生まれてくれることを期待しています。

■ 主な授業

● 西洋地域史・史学専門講義

西洋史は対象とする時代と地域がひろいので、西洋地域史と史学特殊講義を8講座程度開講し、さまざまテーマの講義が聴けるようにしています。たとえば、古代エジプト史、古代ギリシア史、西ヨーロッパ中世史、近世～近現代ヨーロッパの魔術・魔女論、近現代東欧の民族問題、ナチズム論などです。学生の関心に沿って自由に履修が可能です。

● 東洋地域史 III
(樋口秀実教授)

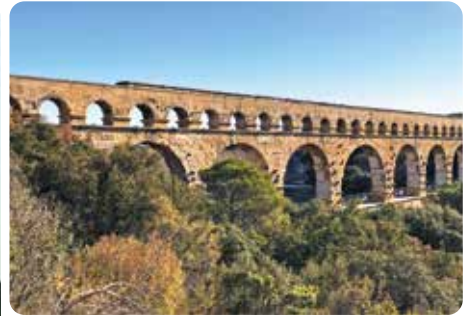
近代の日中関係と中国人のなかの対日協力者（「漢奸」と呼ばれる。漢奸は売国奴、裏切り者の意。代表例として溥儀や汪兆銘）の動向とを検討することで、近代日本＝加害者、近代中国＝被害者という一面的な歴史の見方を修正し、東アジア全体の政治的変動のなかで日中関係史を見直していこうという授業です。

● 西洋地域史 III・IV
(神長英輔教授)

ロシアと周辺地域の政治史・経済史・社会史・文化史を広く学び、ロシア・中東欧・中央ユーラシア地域を理解するための知識を培います。ロシアはキリスト教世界としてのヨーロッパの一部として発展しつつ、古代から中世にかけては地中海世界や中央ユーラシア世界と、近世から近代にはアジア・太平洋地域と関わりを深め、20世紀には社会主義国家として世界に影響力を及ぼしました。前期は20世紀の歴史、後期は古代から19世紀までの歴史を扱います。

● 史学専門講義
(石丸由美兼任講師)

オスマン帝国のバルカン半島に対する支配のあり方をみることで、オスマン帝国の多様性を理解し、「オスマン帝国史＝トルコ史」「東洋史のなかのオスマン帝国史」という誤った歴史認識を訂正しようという授業です。



■ 教員紹介 (氏名 専門分野 / 主な研究テーマ)

<p>教授 大久保桂子 Okubo Keiko</p>	<p>西洋近世史・近代史 (イギリス近世史) / 18世紀イギリスの政治史 イギリスの「財政＝軍事国家」論、近世ヨーロッパにおける国家形成と「軍事革命」論、近代イギリスの女性史</p>
<p>教授 神長英輔 Kaminaga Eisuke</p>	<p>ロシア近現代史、日露交流・関係史、東北アジア近現代史 / ロシア極東近現代史、漁業をめぐる日露関係の歴史、東北アジアのコンプ産業の歴史、うたごえ運動の歴史、現代ロシア生活文化史</p>
<p>准教授 江川式部 Egawa Shikibu</p>	<p>中国古代～中世史 / 中国の祭祀儀礼制度史、礼・法関係史</p>
<p>教授 樋口秀実 Higuchi Hidemi</p>	<p>東アジア国際政治史 / 近代日中関係史、清末・中華民国時代の中国政治史</p>

教員からメッセージ



大久保桂子 教授

外国史に語学力は必須。
でも、歴史とは一筋縄ではいかないものだと
終わりのない深い「学び」もわかっていくでしょう

外国史を専攻すれば、外国の昔のことなら何でもできる、そう思っていませんか？史学科へ行けば、あなたの好きな歴史上の人物を調べ、その人物の伝記を書くことができる、そう思っていませんか？いいえ、そうはいきません。高校の世界史の教科書に書かれている出来事や、歴史映画やドラマで描かれている人物と、大学で学ぶ外国史とでは、別世界といえるほどの違いがあります。史学科は歴史を研究するところですから、研究に値することを研究していただきたい、と学生さんにはいつもお願いしています。

では、研究に値することとは何でしょうか。どうすれば、研究に値する主題とそうでない主題を区別できるのでしょうか。その心得を史学科で学んでください。たいていの学生は、2年生が終わるまでには、わかるようになります。そして、思っていたより歴史は奥が深い、ああ、語学ができるようにならなくちゃ、と思うようになります。外国史を学んで、歴史とは一筋縄ではいかないものだな、学ぶことには終わりが無いな、と卒業するときに思っていたら、私は本望です。



地下に埋もれた遺跡は、
何を伝えようとしているのか
その背景には、どんなドラマがあったのか
考古学。それは、空想ではない

■ 概要

考古資料の見方や遺跡の発掘調査法などを実践的に学び、モノによる歴史学の視座と方法を身につける

考古学とは、地下に埋もれたさまざまな遺跡や遺物をもとに過去の人類文化と歴史を読み解いていく学問です。史料に基づく文献史学とは取り扱う資料が異なるため、方法論や研究法も異なります。過去の人間生活や文化をその時代のモノから実証的に研究できるのが考古学の魅力であり、文字のない先史時代はもちろん歴史時代の事柄も広く研究対象になります。考古資料の見方や遺跡の発掘調査法、研究方法などの知識・技術を実践的に学び、モノによる歴史学の視座と方法を身につけることが考古学コースの目標です。また遺跡の保護・継承・活用はこれからの地域づくりと文化の豊かな創造にとって大切であり、そのような人材の育成にも力を入れています。

■ 主な授業

● 考古学調査法Ⅰ・Ⅱ / 考古学実習Ⅰ・Ⅱ

(谷口康浩教授、深澤太郎兼担准教授)

夏季休暇期間中におこなう遺跡の発掘調査に参加して、考古学調査の基礎知識とさまざまな技術を実習する授業です。前期には測量器材の使い方や調査対象遺跡について勉強し、発掘の計画と準備を進めます。後期には出土した遺物や記録を整理し、発掘調査報告書をまとめます。本格的な写真撮影やパソコンを使った文書・画像の制作なども伝授します。現在取り組んでいるのは、長野県穂高古墳群(古墳時代)と群馬県居家以岩陰遺跡(縄文時代・弥生時代)の発掘調査です。

● 考古学各論Ⅰ～Ⅷ

(谷口康浩教授・原田昌幸兼任講師・寺前直人兼任講師・古谷毅兼任講師・鳥越多工摩兼任講師)

日本考古学の最前線の研究成果や論点について、縄文時代(Ⅰ・Ⅱ)・弥生時代(Ⅲ・Ⅳ)・古墳時代(Ⅴ・Ⅵ)・近世(Ⅶ・Ⅷ)の時代別に詳しく講義する授業です。歴史の流れや文化の変遷を長い時間のスケールで考えられるのが考古学の特長です。これらの各論を通して履修すれば、狩猟採集から農耕社会へ、さらに国家が形成される時期から、江戸時代の社会と文化までの長いプロセスを知ることができるでしょう。

● 文化財行政論

(佐藤雅一兼任講師)

文化財行政が取り組む文化財の保護と活用は、近年その重要性がますます高まってきています。文化財保護の歩みを戦前からたどり、文化財保護法における文化財保護の制度と枠組みを読み解きつつ、豊富な実例をもとに文化財の保護と活用について考えていく授業です。卒業後、文化財行政に携わる専門職に就職することを希望する学生には大いに参考となる内容です。



■ 教員紹介 (氏名 専門分野 / 主な研究テーマ)

- | | |
|--|---|
| <p>教授 谷口康浩
Taniguchi Yasuhiro</p> <p>教授 青木 敬
Aoki Takashi</p> <p>助手 大日向一郎
Obinata ichiro</p> | <p>先史考古学 / 縄文時代の考古学、縄文文化の起源の探求</p> <p>歴史考古学 / 古墳時代の考古学、東アジアの都城と墳墓・寺院</p> <p>中国考古学 / 西周文化、秦文化、墓制</p> |
|--|---|



教員からメッセージ



谷口康浩 教授

充実の資料と蔵書、そして授業。
チームワークの大切さを学ぶ遺跡発掘調査。
本気な「考古学」が待っている。

考古学コースの特色ある授業の一つに「考古学調査法」があります。毎年夏に行う遺跡発掘調査の実習であり、30年以上も前から続く伝統の授業です。遺跡の発掘を実際に体験し、出土資料の整理から報告書作成までを実習生たちが主体的に行う中で、考古学のモノの見方や考え方、遺跡発掘の方法を実践的に学びます。寝食を共にしながらの10日余りの発掘で実習生は大体へとへとになります。その後の整理作業も長く根気の要る課題であり、思うようにはかどらない報告書作成に誰もが思い悩みます。普通の授業では味わえないさまざまな経験を通して考古学を深く理解すると同時に、本当の仲間をつくりチームワークの大切さを学んでいくのです。ここから巣立った卒業生の中には、埋蔵文化財関連の専門職に進んだ人も少なくありません。考古学関係の授業は、この実習を含め毎年50講座近くが開講されています。学内には全国有数の考古学関係の蔵書や考古学資料館もあります。國學院の史学科で「考古学」を本気で学んでみませんか。



本格的な発掘調査をとおして 学べることは何か。

考古学調査法Ⅰ・Ⅱ／考古学実習Ⅰ・Ⅱ

●群馬県吾妻郡長野原町居家以岩陰遺跡



縄文早期・約8300年前の埋葬人骨（成人女性）



縄文学のバイオニア、小林達雄名誉教授を現地指導にお迎えする



最新の測量技術で一つ一つ遺物の出土位置を記録する

考古学的な調査・研究の根幹となるのは、遺跡の発掘調査と発掘調査報告書の作成です。発掘調査とは、研究目的のために仮説を立て、発掘によってそれを検証する作業です。そして、発掘の結果あきらかになったデータを公にする必要がありますが、そのために発掘調査報告書という書籍を作成し、公開することが求められます。こうした発掘調査から発掘調査報告書の作成にいたる一連の調査方法を学ぶのが、ここで紹介する考古学調査法Ⅰ・Ⅱと考古学実習Ⅰ・Ⅱの各授業です。

考古学実習で現在調査の対象とする遺跡は2ヶ所です。

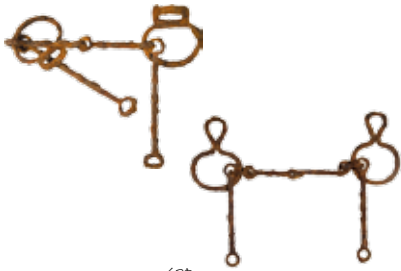
まず、先史考古学分野として縄文時代早期の岩陰遺跡である群馬県吾妻郡長野原町居家^{いよいよわかげ}以岩陰遺跡（谷口康浩教授担当）です。もうひとつが、歴史考古学分野として古墳時代後期の群集墳（同時多発的に古墳がつくられて群集したもの）である長野県安曇野市穂高古墳群F9号墳（青木敬教授担当）です。いずれの遺跡も毎年夏季休暇に現地に出かけ、発掘調査を実施しています。

居家以岩陰遺跡では、埋葬人骨が20

個体以上出土しているほか、岩陰前の灰層から土器や石器、動植物の遺存体が出土するなど、縄文時代の社会や精神文化、縄文人の起源・系統がうかがえる貴重なデータが得られています。

いっぽうの穂高古墳群は、長野県下有数の群集墳で、このうち2009年からF9号墳を調査しています。石室から土器・武器・馬具・装身具などが数多く出土し、遺物からF9号墳は6世紀末頃につくられ、11世紀にいたるまで繰り返し利用された古墳であることがあきらかとなってきました。

●長野県安曇野市穂高古墳群 F9 号墳



出土した馬具の一部 (轡)



石室内からみつけた武器類と土器



現地説明会には大勢の人が来跡する



F9 号墳の横穴式石室。内部から多数の遺物が出土した

考古学調査法Ⅰでは、発掘調査に必要な技術の習得と、対象とする遺跡とその時代の先行研究を学び、来るべき発掘調査に備えます。夏季休暇中に実施する考古学実習Ⅰ・Ⅱは、現地で発掘調査に参加し、掘削や検出、遺構・遺物の記録を作成など、学生が意見を出し合いながら調査を進めていきます。期間は10日程度、同じ宿舎で寝食を共にしながら、発掘調査は朝から夕方、時には夜までおよぶことも少なくありません。宿舎に戻ってからも、夕食後に出土した遺物や作成した記録類の整

理に迫られ、期間中はまさに「発掘調査一色」の日々を過ごします。後期の考古学調査法Ⅱでは、発掘調査報告書を刊行するための各種の作業にとりくみます。

発掘調査報告書に必要な図面や写真図版を作成し、文章の執筆から編集まで一貫して学生自らが主体的にかかわる例は、全国的にみても非常に珍しく、國學院大学の考古学コースを特徴づける教育のひとつです。毎年、「遺跡調査を経験してみたい」と志願して、考古学調査法Ⅰ・Ⅱや考古学実習Ⅰ・Ⅱを履

修する考古学コース以外の学生も数多くいます。発掘調査・研究を職業にしたいと考えている学生はもちろんのこと、本当の仲間ができること、みんなでひとつの目的を達成すること、相手へ十分に意図が伝わるような日本語の文章を書くことなど、その後のキャリア形成にも重要な要素が詰まった考古学調査法と考古学実習の授業は有益な経験になるはずです。もちろん発掘調査報告書の作成まで、決して楽な道ではありませんが、濃密でここでしか味わえない経験ができるでしょう。

仲間と古地図を手に山中の古道を歩く。
麓に街並みが見えたとき、なぜかほっとした。
風景のなかに、歴史の息づかいを感じた日

■ 概要

古地図・絵図を持って歴史を歩く
地域がつくってきた文化・景観を読み解き、次世代へ

人々のくらしは、風土と歴史に培われた「地域」のなかで営まれてきました。そこには風土に適合したくらしを維持してゆくための「文化的景観」が造りあげられ、さまざまな生活文化が育まれてきました。過去から現代に継承されてきたこれら「地域」の生活文化について、文字史料だけでなく、地名や景観、古地図・絵図、建築・石造物などの文化財や伝統芸能など、「地域」に根ざしたさまざまな歴史遺産の調査を通じて、その固有の価値を解明し、これらを次世代に継承してゆくための実践に取り組みます。

古地図・絵図に描かれた伝統的景観を復原する歴史地理学的な手法を基礎として、フィールド・ワークや各種の文化財・歴史遺産の調査を通じて、環境と生業活動との関わりや、地域に生きた人々の社会生活の諸相に迫るとき、一度失われると再生が困難な生態系や過去の生活文化の貴重さを体得することができるでしょう。

■ 主な授業

●文化景観各論Ⅱ

(林和生教授)

近世・近代における都市と村落の様々な景観がもつ特徴と、それらの形成および変化のプロセスとメカニズムの解明をめざす授業です。具体的には近世の城下町や在郷町・宿場町などの都市的景観や、開発ともななって形成された特色ある村落景観と付随する土地利用システムを取りあげ、都市と村落のあり様とその特徴をとらえる作業を実践し、様々な歴史的景観のもつ意義について考察します。

●絵図古地図研究

(三河雅弘兼任講師)

古今東西の絵図や古地図には、文字史料では伝達できないさまざまな情報が、グラフィックに表現されています。そこには、過去の景観や場所に関する個別具体的な情報にとどまらず、過去の社会が共有していた地域や国土・世界のイメージが埋め込まれています。こうした情報を読み取るためには、絵図や古地図の表現のルールを正しく理解する必要があります。この講義では、多数の事例を用いて、絵図・古地図読解の方法をわかりやすく講述します。

●地域文化各論Ⅰ

(湯澤規子兼任講師)

日本各地の伝統的「地域産業」と、それを支える人びとの「くらし」の歴史的特徴、地域的特徴を具体的に考える授業です。「くらし」とは、衣食住の世界というだけでなく、日々の営みである生産と生活のトータルな姿を意味します。①日本の農山漁村と女性たち、②ライフヒストリーからみた伝統織物業と地域、③近代日本の織物と農村、④ぶどうとワイン、甘夏と海の地域史を事例として考えます。

●地域・景観調査法

(吉田敏弘教授)

地域・景観調査の基礎となる絵図・古地図や各種の地図・空中写真類に関する知識を深め、写真画像やデジタルマップのPC処理法の習得をめざします。後者で用いる地理情報システム(GIS)処理の習得は、学生の就職にとって利点となるスキルです。また、フィールドワーク実習をかねて、年2回の伝統的農作業体験(岩手県一関市)を実施し、伝統的農村景観をつぶさに観察すると共に、地域住民との交流を通じて、保全のための実践に取り組みます。





■ 教員紹介 (氏名 専門分野 / 主な研究テーマ)

教授 林 和生
Hayashi kazuo

歴史地理学、地域研究 (中国) / 中国近世の商業と商人、中国都市の歴史的景観と生活空間

教授 吉田敏弘
Yoshida Toshihiro

歴史地理学、地図史 / 日欧の中世農村論、荘園絵図・寺社絵図をはじめとする中世絵図研究

教員からメッセージ



吉田敏弘 教授

今、君が見ている「景観」はどう作られてきたのか。
歴史軸からフィールドで、文化を掘り起こそう。

近年大きな話題となっているユネスコ世界文化遺産のなかには「文化的景観」というカテゴリーがあり、既に世界各地の価値ある景観が文化遺産に登録されてきましたが、国内でもおよそ十年前から文化庁は保護すべき文化財として「重要文化的景観」の選定を進めています。自然環境と歴史＝地域文化が一体となった歴史遺産として、「文化的景観」にはかけがえのない価値が認められるようになりました。全国の棚田の保全が叫ばれてきたのも、こうした文化的景観保全の一環です。

2013年度より史学科の新たなコースとして、「地域文化と景観」がスタートしました。文献史料以外のさまざまな歴史資料に光をあて、現在に生きる歴史遺産＝地域文化の深い追求をめざすその大きな柱が「景観」です。いまや「景観」は地域活性化の重要な資源としても、その価値の再発見が期待されています。また、景観それ自体や古地図・絵図から、過去の災害の痕跡を読み解き、今後の防災に役立てることも重要な課題です。学生と共に絵図や古地図を手にフィールドを歩き、地域住民とのふれあいを大事にしながら、現代社会と深く関わる歴史研究を模索していきたい、と念じています。



学芸員は、蒐集した史・資料を研究し、
語らせ、伝え、守り、未来へとつなぐ。
もっどもっと、アクティブな博物館になってゆく

■概要

歴史ある博物館学講座。理論と幅広い実習で、博物館を深く学び、学芸員資格を取得する

國學院大学博物館学講座は、昭和 25 年（1950）に制定された「博物館法」に基づき昭和 33 年に全国で 3 番目に開講され、60 年余の歴史があります。この間、8000 人以上の有資格者を輩出し、約 1,000 名の卒業生が現在も学芸員として博物館で活躍しています。

平成 21 年（2009）には、國學院大学大学院に文学研究科史学専攻博物館学コースが新設され、修士（歴史学）と博士（歴史学）を取得しています。

学芸員資格の取得には、国家試験と大学での講座による 2 方法があります。開講科目は、文部科学省令で定められており、「生涯学習概論」「博物館概論」「博物館概論」「博物館経営論」「博物館資料論」「博物館資料保存論」「博物館展示論」「博物館情報・メディア論」「博物館教育論」（以上 2 単位）「博物館実習」（3 単位）の 9 科目 19 単位が必要です。取得資格は、一生涯有効で、履歴書にも書ける資格です。

■教員紹介 (氏名 専門分野/主な研究テーマ)

教授 内川隆志
Uchikawa Takashi

博物館学/博物館学史・博物館資料論・文化財保護史

助手 二葉俊弥
Futaba Toshiya

博物館学/台湾博物館史、海事博物館等、東洋史(台湾史)

■主な授業

國學院大学の博物館学講座の基本趣旨は、各種の専門領域が存在する博物館の中でも、國學院大学の専門性に整合した人文系（考古・歴史・民俗）博物館の学芸員を想定した内容で構成しています。

「博物館資料保存論」「博物館展示論」は、日本文化に内在している伝統的資料保存方法（温湿度の一定化・防虫等）や絵馬殿・見世物・薬品会・物産会・勧業博覧会等の展示を題材として“展示”の理解を求めます。

●博物館実習Ⅰ～Ⅳ（3 単位）

実習Ⅰ・Ⅱは、特別展構想やミュージアムワークシート等を作成する授業です。

実習Ⅲは、3泊4日で地方の博物館を見学することで、地域博物館の現状と収蔵庫等の管理部門を理解することが目的です。

実習Ⅳは、実物資料の記録方法（2次資料化）の技術取得と刀剣・甲冑・掛け軸をはじめとする歴史資料に関する知識と取り扱いの具体的方法の修得を目的とします。

●大学院での博物館学コース

平成 21 年（2009）に設けられた博物館学コースは、博物館学の体系的な知識と技能を備えた博物館学研究者と上級学芸員の養成が目的です。すでに、約 60 名の修士（歴史学）を取得しその大半は、東京国立博物館・三重県総合博物館・板橋区郷土博物館をはじめとする全国の博物館に勤務しています。また、5 名の博士（歴史学）取得者もあり、大学教員として博物館学を講じています。



歴史・社会を学び、現在を見つめ直す そして、未来をつくる人を育てる それが「教える」という仕事

■概要

専門的知識と教養とを兼ね備え、教育現場で活かせる教員を目指しましょう

本学は「教職の國學院」ともいわれ、今日までに多くの教員を社会に送り出してきました。史学科では、教職課程の科目を履修し要件を満たすことで、中学校教諭免許状（社会）、高等学校教諭免許状（地理歴史）を基礎免許として取得することができます。教職課程では、学びの本質、教員の役割、授業づくりに大切なこと、などを考えつつ知識を深めていきます。学科で身につけた専門的知識と幅広い教養とを、現場で活かせる教員がいま求められています。

■教員紹介（氏名 専門分野／主な研究テーマ）

教授	澤田浩一 Sawada Koichi	社会科教育、公民科教育、道徳教育史
准教授	多和田真理子 Tawada Mariko	日本教育史、教育学／近代地域教育史、学校の設置運営と地域社会

■主な授業

1年目には、教育の思想や歴史、現代社会における教育のあり方などを学びます。「教職論」などの授業を通して、教育や教職に対する自身のイメージを、生徒の視点だけでなく教師側の立場からも深めていきます。

2年目からは、「社会科教育法」などの授業で、実際に授業をデザインする際に必要なことを学んでいきます。学習指導案（授業の計画）を作り、実際に「教える」経験をしてみることで、自分の学問観・教育観が変わるかもしれません。

3年目には、生徒指導や教育相談など学校生活全体に関することも学びます。また、実習校との交渉、事前指導にあたる「教育実習 IA」などで、教壇に立つ心構えを固め、準備を進めます。

そして、多くの人は4年目の前期に教育実習を行い、「先生」を経験します。後期の「教職実践演習」で、教育実習の経験や教職課程での学びを振り返り、自身が教師となるに当たっての課題と向き合います。卒業後、教職に就いた後も、学びは続きます。大学の4年間は「学び方を学ぶ」日々なのです。

教員からメッセージ

「学ぶこと」、「教えること」を本気で考えましょう。

教員免許取得のために履修が必要な科目は、決して少なくありません。科目ごとに予習復習や授業準備などの課題もありますし、介護等体験や教育実習なども受ける必要があります。「免許だけとっておこう」という考えは通用しないでしょう。

しかし「学ぶ」というのは人間の本質的な営みでもあります。まずは自分自身が、史学科での学びに、本気で取り組んでください。専門的知識と、学ぶことへの熱意があってこそ、教員として奥深い授業をすることができるのです。そして、学ぶとは何か、教えるとは何かを本気で考えましょう。そのために役立つのは幅広い教養です。生活の中で、多くのことに興味をもちましょう。いろいろな活動に参加するのもよいことです。それらのすべてが糧になる、それが教員という仕事です。



“実証史学”の立場から、古代天皇制の歴史を分析してみよう。

教授 佐藤長門



左：「御即位図」（國學院大學博物館所蔵）
右上：「続日本後紀」巻五（國學院大學図書館所蔵）
右下：京都御所 紫宸殿

日本時代史Ⅰ・Ⅱでは、古代天皇制がどのような変遷をたどっていったのかを中心に、前期のⅠでは8世紀を、後期のⅡでは9世紀から10世紀前半までを講義していきます。

みなさんが中学・高校で学んできた古代史をふり返ってみると、7世紀までの令制以前の段階においては蘇我氏などの、8世紀からの律令国家の時期においては藤原氏などの、氏族を主役にした歴史事象の説明や解釈がなされてきたのではないのでしょうか。それは戦後の歴史教育が、戦前・戦中における極端な天皇中心の歴史観、いわゆる“皇国史観”にもとづく歴史教育の反省から出発したため、天皇と対比される存在として氏族に焦点をあてた歴史教育が実践されてきたからでした。このような氏族

中心の歴史叙述は、中世以降の幕府政治をになった源氏・北条氏・足利氏・徳川氏などを基軸とする記載とも親和性を持ち、また日本列島各地に勢力をはっていた地方豪族の掘り起こしにもつながり、権力者の物語だけではない新たな古代史像を“発見”するきっかけにもなった点で、評価すべき方向転換でありました。

ただここで忘れてはならないのは、好き嫌いは別にして、日本古代は“専制君主制”の時代であったということです。つまり当時の最終的な判断は蘇我氏でも藤原氏でもなく、天皇（大王）が下していたのであり、その姿を歴史の表舞台から隠してしまったのでは、正確な歴史解釈はできなくなってしまうのではないかと思います。

國學院大學の史学科は、その創立当初から史料にもとづいて歴史を構築する“実証史学”を標榜してきました。日本古代の史料には、天皇や氏族はどのように描かれているのでしょうか。それは、みなさんが中学・高校で習ってきた教科書的な古代史と、はたして同じなのでしょうか、あるいは違うのでしょうか。日本時代史Ⅰ・Ⅱでは、以上のような問題関心のもと、戦前・戦中におこなわれた天皇中心史観でも、戦後一貫して続いている氏族中心史観でもない、“実証史学”にもとづくニュートラルな立場から、古代天皇制の歴史を分析する実験をおこなっています。この試みが成功しているのか否かについては、ぜひみなさん自身の眼で確かめてみてください。

膨大な蔵書から新しい歴史を見つけよう

國學院大學図書館

本学の図書館は、半世紀あまり利用された旧館の閉鎖にともない、2008年に学術メディアセンター（AMC：Academic Media Center）内にリニューアルオープンしました。2階・3階には開架スペース、参考図書室、グループ学習があり、1階・地下2階部分には日本有数の収蔵能力をもつ書庫が設置されています。

國學院大學の長い歴史とともに歩んできた図書館は、勉強に励むにふさわしい落ち着いた環境を整えています。歴史・文

学・宗教など人文学研究の専門書も揃っていて、みなさんの4年間の勉強や卒業論文研究を支えてくれることでしょう。

リニューアルとともに、オンラインによる書誌情報、アーカイブス、外部データベースへのアクセスも容易になりました。また、本学は8大学による「山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム」、13大学による「横浜市内大学図書館コンソーシアム」に加盟しています。これらのネットワークを最大限に活用しながら、新しい研究を進めることもできます。



日本の伝統文化の奥深さを膨大な実物資料で実感する

國學院大學博物館

1882年に創立されて以来、國學院大學では日本の伝統文化を明らかにするためにさまざまな研究を行ってきました。この研究の基礎資料として威力を発揮してきたのが、図書館に納められている膨大な書籍類と考古資料・神道資料など、大学が所蔵する実物資料です。これらの実物資料を、展示しているのが、國學院大學博物館です。

ここでは、校史・考古・神道という三本柱のテーマに

よる展示を行っています。いずれも國學院大學が長年研究してきた国学の基礎となるもので、日本の伝統文化を理解するうえで、きわめて貴重な資料です。

夏期・冬季休暇や展示替えの休館以外は、日曜日も含め自由に見学できますので、より多くの方にご覧いただき、勉学の手助けにさせていただくとともに、日本の伝統文化の奥深さを実感していただければと思います。



在學生に聞いてみよう。

< 座談会 > 國學院の史学科って、 どんなところ？



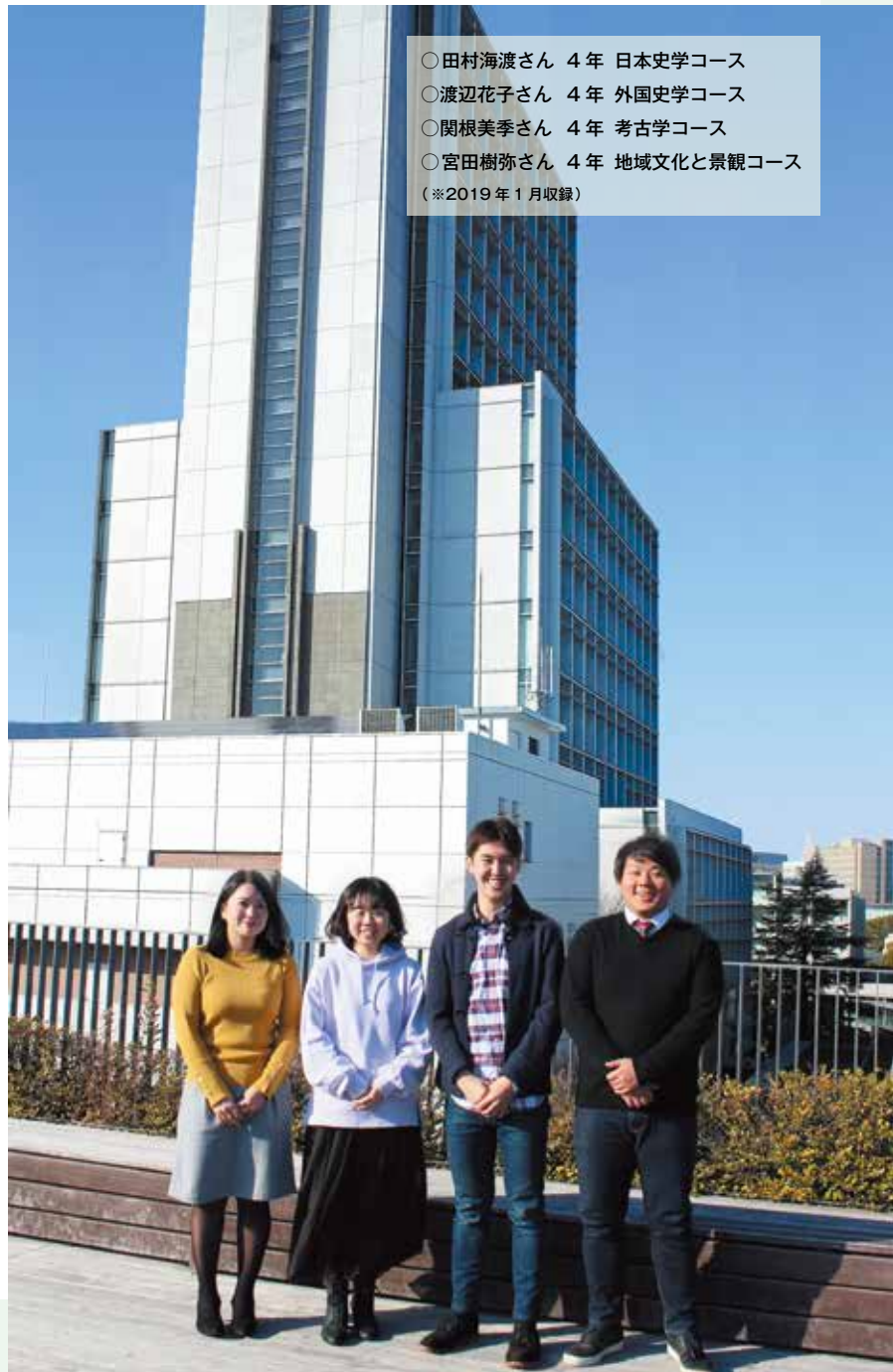
歴史を本格的に学んでみたい！でも、具体的にどんな勉強をするのかな。
高校時代の学びとの違いって何？
そして、その面白さは？ 在學生たちに聞いてみました。

● 國學院大學の史学科を選んだ理由

田村 高校2年のときに日本史を選択しました。将来の夢が教員だったので、日本史と教職課程が充実している大学と絞ったときに、國學院大學だ、となりました。なので、高校2年生のときから第一志望でした。先史から近現代までの専任教員が多いですし、本物の史資料もたくさんあるとガイドブックを見て知ったのですが(笑)、現物を見て研究したいなと思いました。

宮田 僕もけっこう同じところがありますね。ずっと歴史が好きだったので、大学は史学科に進みたいと考えていて、さらに教員にもなりたかったので國學院大學は志望校の一つになっていました。ただ、古代から戦国時代の歴史が身近に感じられる関西の大学もいいなと思ったこともありました。東京で生まれ育ったので、ほかの土地での学生生活もいいかなと…。結果的に、國學院大學にAOで受かったので進学しました。

関根 私は、とにかく理系の科目は苦手でした…。かといって文系の特定の分野も決まっていませんでした。それでいろいろ調べていたら、國學院大學史学科が指定校になっていると知りました。実は、母がかつて受験して落ちたところだったんです(笑)。母は、考古学だったら國學院史学科が絶対にいい!と断言して、私の背中を押してくれました。専任教員や発掘調査実習なども充実していたので、入学後はやった



- 田村海渡さん 4年 日本史学コース
 - 渡辺花子さん 4年 外国史学コース
 - 関根美季さん 4年 考古学コース
 - 宮田樹弥さん 4年 地域文化と景観コース
- (※2019年1月収録)

～って、感じでした。

渡辺 西洋の古代史を学びたいという気持ちはずっとあったのですが、志望校がなかなか決まりませんでした。一般入試で何校か受けて、合格した何校かのうちから、國學院大學を選びました。國學院大學というと日本史や考古というイメージが強いかもしれませんが、西洋古代史の教授（古山正人先生）がいらしたことで、そして博物館学に強いということが決め手になりました。私は、学芸員資格を取りたかったので、これまで多くの学芸員を輩出し、実物資料をたくさん所蔵する博物館もあるところが魅力になって、進学を決めました。

史学科での学び

関根 考古学を学びたいと思って入りましたが、1、2年生では、日本史、外国史はもとより経済や法律など必然的にいろんな分野を履修します。だから、幅広く歴史や文化に触れられます。固定化せず、選択肢はいろいろあると思うようになったし、そういうふうに関心のあるカリキュラムが組まれているんだとわかりました。史学科も渋谷キャンパスで、すべての授業が受講できるようになったので、時間割の組み方次第でさらに見聞を広めることができると思います。

宮田 僕は教職課程も受講したので、科目はいろいろ取ることになりました。授業が7限まで開講されているし、土曜日も開講されているので、ほかの大学に比べても授業選択の幅が広くて自由度が高いですね。その過程で、高校時代

まで城マニアだった僕が…、実はAOの論文も城についてだったのですが（笑）、気がつけば、卒論は「江戸時代の観光について」です。それは他学部も含めて幅広い分野の授業が履修できるシステムだったからこそ、自身で気づけた発見だったと思います。

田村 1、2年で迷えるって、いいよね。僕も、日本史だけでなく世界史も履修しました。それにしても、先生方の講義を聴いていると高校までの教科書から学ぶ歴史ではなくて、研究する歴史というのが見えてきて、面白いなあどわくわくしました。「史学入門」という科目では、史学科のいろいろな先生がご自身の研究について話されるので、時代やテーマだけでなくそれぞれの先生の魅力もプラスされて、歴史やその研究そのものが、人間味溢れた興味深いものになっていきました。

それぞれの専攻コースでの学び

田村 日本史学コースは、近現代、近世、中世、古代といろいろな時代があります。中世史の矢部健太郎先生のゼミも魅力的でしたが、平安時代の貴族社会について時代の研究がしたかったので古代史の佐藤長門先生のゼミに入りました。文献はほとんどが漢文です。感動したのは、高校時代に教科書に載っていた藤原道長の「この世をば わが世とぞ思ふ 望月のかけたることも なしと思へば」の原文が出てきたときです。そこはスラスラと読めた。ああ、こうやって教科書ってできているんだ、いろんな研



< 座談会 > 國學院の史学科って、どんなところ？

究が集大成されたものが詰まっていたんだと、感激しました。教育実習のとき、たまたまそのあたりの内容だったので、「実は、この原文は～」と自信に満ち満ちて授業してしまいました(笑)。ちなみに、教職課程は科目数が多くなりますが、教育とは何かについて、深く考えることができました。卒業後は、母校の教員になります。

宮田 地域文化と景観コースでは、荘園絵図を研究し、田植えをしに地方に行くゼミもあります。林和生先生のゼミでは、古地図を持って東京を見に行き、写真を撮って考察するというプログラムがありました。それで僕は、東京の再発見ができました。東京生まれなので、22年間も東京で暮らして、自分としては詳しいかなと思っていたけど、まだまだ全然！ここにこんな歴史があったんだ、東京も捨てたもんじゃない、面白いとはまりました。地図がもっと好きになったし、古地図があると、長い時間見入ってしまいます。日本の場合、建物が変わっても道や坂や区画が同じことが多いので、想像がグワーツと膨らむんです。歴史を歩いている感じ。文字史料だけでなく、足も使う歴史です。

関根 考古学コースは、旧石器時代、縄文時代、弥生時代などの先史時代と古墳時代から中世・近世まで広く扱う歴史考古に大きく分かれています。どちらも遺跡発掘調査の実習があって、これが一番の特徴です。私は1年生の時から特別参加生として参加していたのですが、専攻してからはさらに本格的になりました。発掘前にその調査法についての授業があり、夏に10日

ほどの調査実習をし、それが終わったら、考古学実習室で遺物の整理作業や実測をし、原稿を書き、校正などを経て、一冊の報告書にまとめます。それを全部学生がするのです。知力も体力も気力も必要で本当に大変な研究ですが、それでもというか、それだからこそ、楽しい。ここまでできるのは、國學院大學だけだと思います。

渡辺 外国史学コースの「外書講読」という授業では、西洋史向けの英語と東洋史向けの漢文の授業がありました。毎週、翻訳の宿題があって、なかなかハードでした。西洋史は、1年から4年まで英語の文献を読むのが基本なので、そのおかげで、英語の読解力はついたなあと実感します。それから、古代の西洋史を研究したので、その後、ラテン語も履修しました。現代社会でおそらく誰も話していないような言語なので難しかったけど、貴重な機会でした。

それから、学芸員資格を取得できる博物館学課程が、とても充実しています。青木豊先生の講義も楽しいし、資料の扱い方や記録保存などの博物館実習も学内でできます。くずし字の読み方の基本はこの課程で学びました。それに立派な大学博物館があるので、授業以外でも展示方法や企画展の構成なども身近に見たり、聴いたりできます。この課程は國學院大學ならではのですね。



田村海渡 (たむら・かいと) さん
4年 日本史学コース
浦和ルーテル学院高等学校卒。
歴史学と教職課程、きっちり学んだことが評価されて教員に採用されたと思います。結果論だけど、やっぱり國學院大學を選んでよかったです。



渡辺花子 (わたなべ・はなこ) さん
4年 外国史学コース
千葉県立千葉女子高等学校卒。
博物館学課程は、とても充実しているので、学芸員を目指すなら國學院大學！と妹にも勧めているんです。



関根美季 (せきね・みき) さん
4年 考古学コース
麗澤高等学校卒。
考古学実習では、モノを通して歴史を学んでいきますが、遺跡の調査や発掘、そのまとめなどを通して、チームワークの大切さも学びました。



宮田樹弥 (みやた・みきや) さん
4年 地域文化と景観コース
獨協埼玉高等学校卒。
古地図を持って街を歴史的に探訪する面白さに出会い、就職も、そんな歴史探訪の旅も企画できるかと考え、観光系にしました。

若手からベテランまで、 歴史研究の最前線が体感できる 国史学会

1909年(明治42)11月に発足した国史学会は、2019年に110周年を迎え、史学科とともに長い伝統をもつ歴史の学会です。本学史学科(旧・国史学科)の卒業生を中心に活動していますが、他大学や研究機関の方々も会員に擁する全国規模の学会です。

現在は、6月に総会と大会(公開講演会・研究発表会)、例会(6~8月を除く毎月)を開催し、若手からベテランまで幅広い世代の研究者が、日頃の研究成果を発表しています。例会は、日本古代史・日本中世史・日本近世史・日本近現代史・外国史・歴史地理学・考古学・博物館学の各部会が毎年1回

ずつ開催し、3月例会は史学科と共催で卒業論文報告会をおこなっています。

また、機関誌である『国史学』は1929年(昭和4)11月に創刊、現在は年3冊が刊行され、2021年3月時点で第232号まで刊行されている歴史ある雑誌です。古代史から近現代史までの日本史を中心に、考古学・歴史地理学・博物館学など歴史に関わる多彩な分野の論文・史料紹介・書評などを満載しています。

大会と月例会は非会員でも自由に参加できます。歴史研究の最前線を体感できる場でもあるので、みなさんの積極的な参加をお待ちしています。



機関誌『国史学』



卒業論文報告会は4年間の集大成

歴史学をより専門的に研究できる 國學院大學大学院

皆さんが大学を卒業してさらに勉学を続けたいと思った時には、大学院に進学して、修士号・博士号の取得をめざすことができます。歴史学をより専門的に研究するのであれば、大学院文学研究科の史学専攻に進学することになります。

大学院の授業は史学科の教員が担当しています。また、文学部では哲学科所属の美学・美術史の小池寿子教授(西洋美術史)、藤澤紫教授(日本美術史)も、大学院では史学専攻に所属していますし、博物館学の内川隆志教授も史学専攻の所属となります。ほかに、歴史学の諸分野で活躍している数多くの先生方も兼任講師になるなどして大学院の授

業を担当しています。学部の専任教員以外に数多くの先生方の授業を受けることができるのは、大きな魅力の一つです。

大学院で得られる専門性は、研究職のほか、教職や学芸員にも必要とされています。多くの修了生が大学・高校の教員、全国各地の博物館、発掘調査の現場で活躍しているのは、本学大学院の特徴といえるでしょう。進学した先には専門家になる道以外はないと思うかもしれませんが、大学院での研鑽を基礎に一般社会で活躍している先輩たちもたくさんいます。長く勉学を続けたいと思っている皆さんは大学院への進学も選択肢の一つに加えておいてください。



史学学生研究室



研究の最前線を目指す

卒業生からのメッセージ

史学科から社会へはばたいた
卒業生からのメッセージです。



河野綾華さん

日本史学コース 127 期卒
ロイヤルホールディングス株式会社

私は日々生活する中で、昔の人はどのように生活していたのかと疑問を抱くことが度々ありました。特に生きていく上で欠かすことの出来ない食について興味が湧き、大学で食文化について学びたいと思い、國學院大学に入学をしました。卒業論文は古代日本の行事と食の関わりについて書きました。行事には必ずと言っていい程、飲食が関わっています。行事の際の食には、この食材を食べると長寿になるなど食に意味を成すことが多いです。単純に生きていく為に食べ物を食べるだけでなく、食べることで意味を成す食の面も学ぶことが出来ました。

卒業後は、食に関わる職に就くので大学で学んだことを活かせるのではないかと考えています。



香川七海さん

日本史学コース 120 期卒
日本大学法学部 助教

私が史学科で学び得たものは、「学問 / 科学は、“好み”を超越するもの」という考え方です。史学科では、古文書や遺物などの歴史資料をもとに、歴史的事象を検証する研究スタイル(=実証主義)が採用されています。実証主義は、歴史資料を証拠物件として、埋もれた史実を明らかにする手法です。弁護士や刑事の仕事に似ていますね。実証主義の研究活動は証拠物件がすべてですから、偉人に対する好き嫌いなど、個人の私的感情、つまり、“好み”を研究活動に持ち込む余地はありません。一見、味気ないように見えます。しかし、“好み”を超越するからこそ、研究活動は、異なる“好み”を持つ、人種や民族、社会階層をも超越するものになります。学問 / 科学の前では、だれもが対等に真理の探究者になれる——その魅力を知り、引き込まれた4年間でした。



神谷悠紀さん

日本史学コース 125 期卒
東京都立板橋有徳高等学校

高校で得意科目であった歴史の教員になるための学部選びをする中で、史学科を志望しました。

大学入学後は、自ら歴史を探求するということができず、歴史に対する苦手意識も生まれていました。大学3年から、山崎先生の古代史ゼミに所属しました。その中で、「常識や根拠を疑い自ら調べること」や「論理的に説明する」ことの大切さを学びました。

現在は、都立高校で歴史教員として勤務しています。大学時代に身につけた歴史的な知識だけでなく、卒業論文を書く中で身につけた、「問題点を明らかにし論理的に解決していく能力」が役に立っています。

史学科では、社会人として必要となる基本的な力を身につけることができると実感しています。大学4年間、何事にも探求し続けることに力を注ぎ充実した経験を積んでいってください。



三輪仁美さん

日本史学コース 118 期卒
宮内庁書陵部

進路に悩んでいた時に、ふと時事問題に対して「これはなぜ起こったのだろう」と疑問を抱き、自分なりに調べ始めたことが歴史を学ぶ第一歩でした。

物事の起こりへの関心から日本古代史を専攻しましたが、史学科では専攻を決定するのが3年次のため、それまでにさまざまな時代や地域、分野の授業を受けることができました。現在は、古代から現代までを対象として、皇室制度の調査・編修に携わっています。積み重ねられた歴史を繙くことで、現在や未来に課された問題を解決する糸口を掴めるよう、日々励んでいます。

歴史学は実社会において役に立たないと誤解されがちですが、史実を実証的に解明してゆくプロセスは、どのような進路を選んでも有用です。当時の人々の営みに思いを馳せることは、現在を知ることにつながります。前向きに学ぶ姿勢を忘れずに、ぜひ充実した4年間を過ごしてください。



佐藤青泉さん

地域文化と景観コース 127 期卒
株式会社 CIJ ネクスト

私はもともと歴史が好きだったので、好きなことが学べる史学科志望で受験をしました。

大学では、3年からゼミが始まり、地域文化と景観コースのゼミに入り、フィールドワークによる調査から研究を行いました。実際に中山道を一駅分、6時間かけて歩いてみたりもしました。卒論は、幕末・明治期に日本にやって来た外国人の日記から、彼らは日本をどのように捉えていたのだろうかというテーマで書きました。

高校生のうちに、自分は何が好きなのか、大学では何をしたいのか、その先はどんな仕事をしたいのかということを考えて、自分のやりたいことを見つけてください。歴史を研究したいという人なら、國學院大学ではやりたいことが必ずできると思います。



盛 貴大さん

日本史学コース 127 期卒
船橋市役所

入学するまでは、史学科で何を学ぶのか、全く見当が付きませんでした。高校までの歴史とは違って、かなり専門的な知識が求められるように感じました。しかし、それ以上に史実が正しいのかどうかを考え、史料等を用いて検証する能力が必要だとわかりました。そのためには、講義をしっかりと受けることと、その内容が本当なのかどうか自分の頭で考えることが大切だと思います。教職課程と博物館課程を同時に履修していたので、授業のコマ数はかなりたくさんありましたが、その分たくさんのお話を学べました。卒業後は、船橋市役所の職員として、市民のためにより良いまちづくりを心がけていこうと思います。また、軽音サークルでの活動は、4年間の中でとても大切な思い出になりました。自分たちが幹部の代には、副会長と会計の職に就き、サークルを盛り上げることができたと思います。



石田太朗さん

日本史学コース 126 期卒
日本炭液株式会社

私が史学科を志望したのは、日本近現代史に興味があり、専門的に学びたいと考えたからです。入学後は、歴史研究サークルに所属し文化祭で研究発表を行っていました。日本時代史や日本史特殊講義などの、日本史の授業や学芸員資格の授業を履修していました。3年次からは、日本近現代史のゼミに所属し、卒業論文は嘉仁皇太子（後の大正天皇）をテーマに作成しました。

私は現在、炭酸ガスの国内トップシェアメーカーの工場の総務をしています。工場の出荷作業や、従業員の保険等の申請、経理など業務は多岐に渡っています。卒業論文作成で得た正しい情報を選択するという事は、日々の業務に活かされていると実感しています。

最後に、國學院大学の史学科を受験しようと考えている方にアドバイスを送るとすれば、英語の勉強を頑張ってください。史学科を受験される方は、歴史・国語ではあまり差がつかないので、英語で差をつけられるように頑張ってください。



竹内華奈さん

日本史学コース 127 期卒
東日本旅客鉄道株式会社

もともと高校1年次から史学科を志望していました。その後2年次の進路相談の際、他大学史学科卒の担任教師から本学を強く勧められたため、本学の史学科を志望しました。

そして、矢部健太郎教授のゼミに入り、卒業論文は「後北条氏の対外関係―越相同盟を中心に―」という題目で書きました。

就職は、東日本旅客鉄道株式会社のプロフェッショナル採用で内定をいただきました。プロフェッショナル採用は現場第一線での業務を主としており、まず駅員として勤務し、のちに車掌や運転士など様々な方面へ進んでいきます。

自分が今何を一番学びたいのか、将来何をしたいのかを今一度考えてみてください。両親に話せば友人・兄弟・教師に相談するのもいいと思います。大多数の方が両親に学費を払ってもらえることになるとは思いますが、その学費をどう使っていくかは自分次第です。後悔のない学生生活を過ごせるよう応援しています。



長谷勇汰さん

地域文化と景観コース 127 期卒
株式会社日本アクセス

私は、史学科で学びながら陸上競技部に所属して箱根駅伝を目指し、文武両道の学生生活を送っていました。4年次には、林和生先生の元で「古代ローマの都市景観と人々の生活」というテーマの卒業論文を作成しました。先生は、部活動と両立する私を理解してくださり、テーマに合った文献資料の紹介や的確なアドバイスをくださいました。また、部活動についても温かく見守ってくださいました。國學院大學では、先生方が優しくバックアップしてくださり、自ら探求心を持って学ぶ人をサポートする環境が整っています。是非、國學院大學の史学科で学生生活を楽しんでください。



國分 梓さん

日本史学コース 123 期卒
博物館学コース博士課程前期 125 期卒
東京国立博物館学芸研究部列品管理課登録室
アソシエイトフェロー

大学では日本古代史の山崎雅稔先生のゼミに所属し、少人数のゼミできめ細やかな指導を受けることができました。渋谷という場所柄、様々な博物館・美術館に足を運びやすく、本物を間近に見る機会を多く得られたことも良い経験となりました。

現在、私は東京国立博物館にて収蔵品の管理をする部署に所属しています。展示替えや作品撮影の補助等では、直接作品を扱う機会も多くあり、積み重ねられてきた歴史の重みを感じながら日々の業務に励んでいます。

好きなことを突き詰めていく道のりは険しいけれど、何事にも代えがたい喜びがあります。ぜひ充実した環境のなかで、好きなことに没頭できる貴重な時間を過ごしていただければと思います。



布川美月さん

地域文化と景観コース 127 期卒
東亜道路工業株式会社

私が大学生活で得たものは常に批判的な視点で物事を考えることと様々な考えを持っている友達です。

卒業論文では洛中洛外図屏風をテーマに京都の民衆の生活や娯楽について研究をしました。過去の研究者の考えをそのまま鵜呑みにするのではなく読みながら批判的な視点を持つことで自分の考えにより深みを出せるようになりました。

卒業論文の執筆にあたり行き詰ることも多くありました。その時にゼミの先生や史学科の友達と色々な話をしたりすることで息抜きになっていました。ゼミの先生には卒業論文以外の話も沢山しました。史学科の友達は専攻も違っていたため悩んだ時には自分とは異なる考えが聞けていつも刺激をもらっていました。

大学生活は長いようで短かったですが、沢山の人の出会えた充実した4年間でした。



田辺理奈さん

日本史学コース 127 期卒
島根県庁

幼い頃から父の影響で歴史に興味を持っていたこともあり、國學院栃木短大から國學院大學へ編入しました。編入後は日本古代史ゼミに所属し、必修科目や選択科目の単位を取得しながら、社会教育主事の資格を取りました。就職活動時期になっても授業が多くて辛かったですが、一緒に編入した友人と励まし合ってがんばりました。

就職活動は民間企業を中心に行いましたが、もともと出雲に興味があったため、島根県庁を志望しました。島根県には何の縁もない私ですが、県の魅力を多くの人に伝えたい、県の内部から支えていきたいという旨を面接で伝えたのが合格の鍵であったと感じています。現在は観光振興に関心があり、卒業論文作成にあたって学んだ古代の出雲についての知識が少しでも役に立てば、と考えています。皆さんも学生生活を大切な仲間と過ごし、自分の目標に向かって進めるようにがんばってください。



御座沙季さん

地域文化と景観コース 125 期卒
株式会社グレーストーン

高校までの歴史や古典の授業は暗記科目であって、歴史背景を詳しく知ることはできませんでした。物事は必然ではなく必ず理由があります。その歴史の理由を知りたく私は史学科を選択しました。

私はゼミの中でも地域文化と景観コースを選択しました。もともと衣食住の文化が好きだったこと、時代にこだわらず幅広く研究したかったからです。卒業論文では日本の近代以降の食文化について研究し、肉を食べるようになった背景や昔のカツレツの作り方やルーツ等幅広く研究することができました。

史学科は歴史を研究する学科ですが、自分がやりたいこと気になることはなんでも研究することができます。歴史を積み重ねて行ったからこそ今がある、そして今自分も歴史を繋いでいるという思いで是非史学科で学んでみてください！



福嶋彩子さん

考古学コース 123 期卒
松本市役所教育部文化財課

「史学」と一言に言っても、様々な時代や領域、分野があります。史学科では歴史にまつわる多種多様な講座が設けられています。ここでなら自分が本当に学びたいことを見つけられるのではないかと、史学科を志望しました。

私が選択した考古学専攻では、遺跡を発掘して、本物の遺物に触れ、自分たちの調査成果を報告書として刊行できる機会があります。とても実践的な内容を学ぶことができたため、現在の仕事の中でも活かされていることが数多くあります。

本当にやりたいことを見つけた時、いつでもその分野に突き進んでいける環境が史学科にはあります。何かを始める時に遅すぎるということはありません。大学生活の中で学びの領域を広げ、自分の可能性を見出していきましょう。



飯野拓哉さん

考古学コース 126 期卒
株式会社バスコ

私は在学時、先史考古学を専攻していました。入学当初はただ遺跡の発掘というものやってみたくらいだけだったのですが、その学問の面白さに触れ、次第にのめりこんでいきました。同時に辛いことも多々ありましたが、自分を成長させることができたとても有意義な時間を過ごすことができたと思います。

そんな大学生活を経て、私は現在、主に埋蔵文化財に関する仕事をしています。地面の下から出土する遺物は、遙か昔に生きていた人々の痕跡です。それを記録・保存し、後世に残すことが私の仕事です。遺物は当時の人々の真実を語ってくれますが、それを正しく理解するのは困難を極めます。しかし、同時にとても面白いと思います。國學院大学では発掘調査も毎年行っているのです。少しでも興味があればぜひ参加してみてください。



辻本晴香さん

外国史学コース 126 期卒
大手百貨店勤務

私は高校時代一番好きな科目が世界史でした。そのため、史学科なら大学の四年間も充実して過ごせると考え、志望しました。大学では中国の歴史に興味があったので、東アジア近現代史を専攻しました。史学科の授業では自分から発言することや、議論する機会が数多くあるので自分の視野を広げることができます。もちろん、歴史以外にも様々な分野の講義が開講されているので好きなように多くの知識を得ることができます。3年生になるとゼミにはいり、卒業論文に取り組みます。大変だった思い出もありますが、それ以上に楽しかった思い出や達成感があります。國學院大学には歴史を学びたい学生をしっかり支えてくれる環境が整っていますので、素敵な大学生活がおくれます！



末次明日美さん

日本史学コース 125 期卒
大学職員

グローバル化が進む社会の中では日本を知ることが必要だと考え、史学科に進学しました。國學院大学の史学科は教授との距離が近いことが特徴です。ゼミの教授はもちろんのこと、ゼミ以外の教授も学びたい気持ちにとことん付き合ってくださいました。自ら課題を発見し、多くの史料や論文にあたって論を展開していく史学科では、こうした環境はとても恵まれていたと思います。

今も大切にしている教授達からの教えに「原典にあたる」というものがあります。分からないことや問題にぶつかった時などは、根拠資料を探して解決するように心がけています。必要な資料を探し出す粘り強さと論理的に考える力は社会に出てからも役に立っています。



齋藤友起子さん

地域文化と景観コース 126 期卒
株式会社巴商会総務部

まず、私が本学の史学科を志望したきっかけとして、一つはシンプルに歴史が好きだったからです。そして、もう一つは、本学の史学科は、歴史を学ぶ上での環境が整っていると思ったからです。本学の史学科は、時代や分野ごとに専門的な知識を持った教授がいるため、1、2年の時には幅広い時代について学び、3、4年の時には、自分が興味を持った分野について深く学ぶことが出来できます。

そして、その中で私は地域文化と景観コースを専攻し、浮世絵についての卒業論文を作成しました。大学生活の中でも一番苦労しましたが、その分、やりがいと達成感を味わうことが出来ました。

現在は、商社の人事課に勤務しています。史学とは直接関係のある仕事ではないですが、大学生時代に学んだ探求心や好奇心を活かして日々精進しています。

専任教員からのメッセージ

——ゼミ・研究室紹介——

日本史学コース



さとう ながと
佐藤長門

■日本古代史



高校までの「与えられた歴史」、ただ教科書の記述を覚えるだけの歴史とは異なり、大学で学ぶ歴史学はみずから「創り出す歴史」、教科書の記述すら疑うことから始まる歴史です。つまりそれまでの通説を疑い、それを批判していくものなのですが、その批判は単なる思いつき、空想であってはなりません。歴史学が「学問」を標榜する以上、史資料にもとづいた合理的な根拠が必要になってくるのです。先行研究を鵜呑みにせず、史料にもとづいて批判する能力を養成することを目的として、3・4年次の演習では六国史の最後にあたる『日本三代実録』を取り上げ、学生と輪読をおこなっています。また毎年秋には、ゼミ所属3年生の希望者を対象として、正倉院展(奈良国立博物館)や京都御所の一般公開にあわせた、飛鳥・奈良・京都方面の旅行も企画しています。ぜひ一緒に、日本古代史を勉強してみませんか。

やまさき まさとし
山崎雅稔

■日本古代史



日本古代史は、日本がまだ倭と呼ばれていた時代から平安時代までの歴史を扱います。3～12世紀の歴史です。授業演習では、史料の読み方を学びつつ、学説史や最新の研究にふれて日本古代史の理解を深めます。高校の日本史との違いは、自分で歴史を「発見」す

る点にあります。史書や古文書・木簡などの古代史料の多くは漢文で書かれています。最初は読むのに苦労しますが、少しずつ読めるようになると、新しい「発見」も増えていきます。それが皆さんの歴史研究の第一歩であり、歴史学が一番の面白さであり、熱くなれるところだと思います。

歴史学はこれまでの人間の歩みを様々な角度から明らかにして、私たちの未来を考える学問です。いま、歴史学には専門の知識とともに、広い視野で歴史を見渡す力が求められています。國學院には研究方法の異なる様々な時代・地域の講義が開講されています。それらを通じて、自分の知識を豊かにし、人類の経験を社会に還元するヒントを一緒に見つけてみませんか。

やべ けんたろう
矢部健太郎

■日本中世史



高校までの日本史の教科書では、「中世」は戦国時代で終わり、「近世」は織豊政権から始まります。実際、日本の大学の史学科でも、織豊期は「近世史」の分野として研究されることがほとんどです。しかし、織豊期を単純に「近世」とすることには、いくつかの問題があります。その最大の問題は、織豊期に続く江戸幕府が、その成立の正統性をアピールするため、特に豊臣期に関する歴史を「改竄」、すなわち書き換えていた点にある、と私は考えています。豊臣期を単純に「近世」と認識してしまうと、江戸幕府の「前史」、すなわち豊臣期の諸事象は江戸幕府にどのような影響を与えたのか、という消極的な検討に留まってしまう可能性もあります。豊臣期そのものを研究しようとするれば、「豊臣政権は中世末期に現れ、近世化を目指して挫折した」という見方が絶対的に必要なのです。そのため、國學院大学の史学科では、織豊期を「中世史」の分野として研究しています。この点は、他の大学にない大きな特徴といえるでしょう。

たかはし ひでき
高橋秀樹

■日本中世史



史学科に関心を持っている皆さんは、「歴史好き」かもしれません。でも、皆さんが親しんできたテレビ・アニメ・ゲームや小説が作り出す「歴史」の世界と、学問としての「史学(歴史学)」はちょっと違います。残された資料(史料)から歴史的事実と思われるものを紡ぎ出し、それをその時代の社会や大きな歴史の流れの中に位置づけていくのが歴史学です。中学校や高校で学んだ日本史や世界史は、歴史学の研究成果のエッセンス、しかも、ほんの一部分に過ぎません。歴史学では、史料から結論に至るまでの論証過程が重要になります。その方法を学問として学ぶ場が史学科なのです。ですから、皆さんが「面白い!」と思っていることが、学問としての歴史学にはなじまないこともありますし、逆に歴史学を学ぶ中で、新たな「面白い!」が見つかるかも知れません。

私は、中世前期(院政時代～鎌倉時代)の貴族・武士の社会と政治、貴族の日記や鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』などの史料について研究しています。ゼミでは、質の高い史料を正確に読んで解釈する力を身につけてもらおうと思っています。変化の大きい中世前期の歴史は面白いですよ。

よしおか たかし
吉岡 孝

■日本近世史



私は江戸時代後期から幕末期、幕府の動向や地域社会を主に研究しています。したがってこの研究室には地域史や文化史・幕末の政治史などを学ぶ学生が多く集まります。私は八王子千人同心という幕末期に銃隊編成された江

戸幕府の組織を調べていますが、千人同心だけ調べていても実態はわかりません。幕府の政治動向や地域社会の動き、千人同心に武術を教える家を継いだ近藤勇、千人同心と戦火を交えた長州藩のことなどさまざまな事象を調査してはじめて全体像を把握できます。「構想は大きく、実証は小さく」で、関係論文を広く精読し、大きく幕末史なら幕末史を構想し、確実な実証で論文をまとめることが肝要です。江戸時代は大量の古文書が作成された時代です。当然このような古文書を上手に使いこなすことが、実証をする秘訣です。しかし古文書は「くずし字」と呼ばれる難解な書体で記されている上に、現代社会では使用されない難しい語句や、文体（候文）で書かれ、その内容を把握することは容易ではありません。そのため江戸時代に作成された史料を講読し、卒業論文を作成するための史料を使いこなせる能力を涵養することが大切です。

いわはし きよみ
岩橋清美
■日本近世史



私は、江戸時代の中期から維新期までの地域文化史を中心に研究しています。とくに注目しているのは、村人たちが自らの村や地域の由緒や歴史を書いた史料です。こうした史料の多くには史実と異なる部分もあります。しかしながら、なぜ、このようなことを書き残さなければならなかったのかを考えてみると、新たな歴史像が見えてきます。また、村人たちは様々な書物を読み、国学者などの知識人と交流することで知識を深めていきました。そして、彼らの知識の蓄積は、地震や洪水といった自然災害や疫病、飢饉などから村を守ることに寄与したのです。こうした村人たちの姿に私たちも学ぶところがあるのではないのでしょうか。近世史研究の基本には史料調査があります。くずし字で書かれた古文書を解読することは容易ではありませんが、一つ一つ丁寧に読み解きながら、自分なりの歴史像を構築することは歴史研究の楽しさでもあります。歴史学を学ぶことによって、自分で課題を見つけ、それを解決していく力を身につけることができると思います。

しばた しんいち
柴田紳一
■日本近現代史



國學院の史学科で、学生のみなさんは、数多くの出会い・発見をすることでしょう。図書や史料から教師・友人にいたるさまざまな出会い、はじめて知る多くのことがら、それらは日々の地道な積み重ねからする必然的なものと、わずかなきっかけからする偶然的なもの、いろいろあることでしょう。大切な4年間で、みなさんがそうした経験を少しでも多くできるよう、わたしも心がけてまいります。渋谷のキャンパスもすっかり立派にきれいになりました(30年前にわたしが卒業したころに比べて...)。それでもかわらないものがあります。それは、学生のみなさんの学び導かれたいという心と、教師・職員の教え導きたいという心です。この心と心の交流こそが「伝統」の大きな支えなのだと感じています。長く豊かな蓄積と、続く多くの後進との間にある学生のみなさんには、「縁」を大事にして出会い・発見を重ねることを望んでいます。

てつか ゆうた
手塚雄太
■日本近現代史



私は1920～60年代の政治史について、政党を中心に研究しています。また、國學院大學がキャンパスを置く渋谷、あるいは東京近郊の地域がいかにして現在の姿になったのかについても関心があります。いずれにせよ、日本史学コースでも現在に近い時代が専門分野です。近現代史では、くずし字で書かれた史料以外にも、新聞・雑誌はじめ活字の史料が多数あります。対象とする時代が現在に近いほど史料の字は読みやすくなりますが、その一方で史料の量は膨大となります。卒業論文を執筆するなかでは、大量の史料、そして先行研究に向き合いながら、自分なりの視座を作り出すことが求められます。大量の史料や研究を読むのは大変ですが、史料と史料を結ぶ新たな関係性

を見出した時の爽快感など、史学科で学ぶ歴史だからこそ味わえるものもあります。少し苦しいかも知れませんが、一緒に史料の海に飛び込んでみませんか。4年間で得られるものは少なくないはずですよ。

外国史学コース



ひぐち ひでみ
樋口秀実
■東アジア国際政治史



私のゼミは、東アジアの近代史を中心に、中国・朝鮮古代史以外のアジアの歴史を扱っています。この地域の歴史は、四大文明の3つがあることからわかるように、非常に長く、多様です。なので、3・4年生になって各自の専門が固まってくると、自分の進めている研究テーマは自分にしかわからない、逆に友達の進めている研究は、同じゼミにいるはずなのに、報告を聞いてもよくわからないという珍現象が生まれます。そこで皆さんに期待するのは、自分のやりたいことは果たして何なのかを見つけだす探究心と、他人のやらないことを自分はやってやろうという勇気です。これまでは「友達がやるから自分も何となく」という心持ちだったかもしれませんが、しかし、史学科に入ってから4年間では、「自分がこれから歩んでいく道はこの道だ」というものを見つけられるように頑張ってください。

かみなが えいすけ
神長英輔
■ロシア近現代史、
日露交流・関係史、
東北アジア近現代史



私が研究の対象とする地域はロシア極東と日本列島の北辺です。私は近現代のこの地域の社会と文化の変化を広域の地域史の中で理解し、多様な歴史像を構築しようと試みています。この地域は資源の宝庫です。海は世界有数の好漁場であり、陸には豊かな森林、

地下には多くの鉱物が眠っています。ロシアと日本によるこの地の開発は19世紀半ばに本格化し、こうした開発が先住民の伝統的な生活を変質させ、破壊しました。

近現代は植民地主義の時代です。ロシアと日本はこの地を分割し、内なる植民地として支配し、近代世界システムに組み込みました。近現代のこの地域の歴史はロシア史、日本史、東北アジア史、ヨーロッパ史、環太平洋地域史の一部であり、こうした重層的な歴史の中から見えてくるものは多くあります。世界の諸地域や人間集団の関係の歴史、広域の地域の歴史、地域横断的な諸問題の歴史に関心のある皆さん、いっしょに学んでいきましょう。

えがわ しきぶ
江川式部
■中国古代史、
中国中世史



中国の歴史社会が研究対象です。私は、中国の伝統社会において、祭祀儀礼を行うことが、社会秩序の維持や国家間の関係構築に、どのような役割を果たしてきたのかについて研究をしています。中国のような多民族・多言語・多人口の国で秩序を維持するためには、古来、法律・軍事・経済面だけではなく、精神面からの統制が必要でした。その役割を担ってきたのが儒学を背景とした「礼」や、道教・仏教などの宗教です。そこから生み出された様々な文化は、「漢文」を通じて周辺各地に伝わり、東は朝鮮だけでなく、海を越えて日本にも影響を与えてきました。

ゼミでは、準備も含め多くの時間を費やして「漢文史料」を読むことになりませんが、眺めるだけではちんぷんかんぷんであった史料の裏に「史実」を見抜けるようになったとき、かつて存在した人や時間だけでなく、これまでの自分やこの先の自分の生き方も見えてくる、そんな体験を味わっていただきたいと思っています。

おおくぼ けいこ
大久保桂子
■西洋近代史・近代史
イギリス近代史



史学科で西洋近代史を志望する学生さんは、かなり大勢います。人気の秘密は、やりたいテーマを選ぶことができるから

でしょう。私が担当するゼミ(演習)では、西洋近代史の研究入門書をもとに、各分野、時代の研究動向のなかから、自分が関心をもつテーマを選び、代表的な日本語の研究を読んで、その内容を口頭で報告し、レポートにまとめていただきます。自分がやりたいと思っているテーマは、どう研究すればよいのか、どのような史料があるのか、これによって理解できるからです。これを通じて、自分がやりたい対象を理解するには、欧文文献と原語史料を読む必要があると気づきます。ですからゼミの後半の時間では、英文の研究文献を読む練習をし、語学力のブラッシュ・アップをはかります。難しい英語でも読めるようにならなければ、研究できないからです。本格的な研究レベルに達するには、時間がかかりますが、それを実践して卒業論文に結実できるように、できるかぎり応援するのが私の仕事です。



たにくち やすひろ
谷口康浩
■先史考古学
縄文文化の研究



私の専攻分野は先史考古学です。おもに縄文文化を研究しています。私が担当する考古学の授業には「講義」「実習」「演習」があります。「講義」では考古学の基礎知識や縄文時代の研究事例などを教えます。画像や実測図などの視覚教材をできるだけ使うように工夫しています。「実習」では土器や石器の見方、実測図の描き方などを学ぶとともに、縄文時代の遺跡を実際に発掘します。本物の遺物と遺跡で「考古学」を実体験するわけです。「演習」は研究法や論文の書き方を学ぶ場です。全員で論文を熟読し、要約と批評を繰り返すことで、考古学の方法論を訓練しています。4年生は卒業論文研究の中間発表をします。こうして4年間を過ごすうちに、学生さんたちは考古学専攻生としての意識と素養を身につけていきます。本に書かれたことを鵜呑みにする安直な姿勢ではなく、どうやって自分

自身の論を組み立てるのかを真剣に考えている学生らしい姿をみるときが、いちばん嬉しいですね。「ずいぶん成長したな」と実感される瞬間です。

あおき たかし
青木 敬
■歴史考古学
古墳時代の考古学



考古学とは、人間が生活を営んできた長い年月の中で遺してきた物質的資料を研究対象とします。私は、日本列島の歴史のなかで文字資料が残されている時代、とくに古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代の遺跡を中心に研究を進めています。

自らは言葉を一言も発しない土器や石器、建物の跡、古墳など、これらがいつ・どこで・誰が・何のためにつくったのか解きあかしていくのが考古学の魅力です。ただ、考古学を単なる謎解きで終わらせず、考古学からあきらかになった歴史を学ぶことが必要です。われわれが生きているこの社会が直面する問題を考えるための思考のひとつとして、歴史は大きな力になると思います。考古学を通して歴史を知り、歴史的思考を身につけていくこと、これが私のゼミにおける目標です。

ゼミでは日本列島の遺跡を学んでいきますが、古代の日本のありかたを考える上で避けて通れないのが、中国や朝鮮半島の歴史です。私は、みなさんとこれら東アジアの歴史も視野に入れた対話をするよう心がけています。



ほやし かずお
林 和生
■歴史地理学、
地域研究(中国)



●先生はどんな研究していますか？

中国の大河・長江の下流部には水路が縦

横に走る水郷が広がり、古い伝統的街並みを今に残す「水郷古鎮」が数多く立地しています。私は「水郷古鎮」の街並みの歴史と、街並み景観の保護・保存、また中国近世の商業と交通について研究しています。

●先生のゼミでは何をしていますか？

学生は学期ごとに共通テーマを設けて図書館で文献研究を行い、その成果を順番に報告・質疑・討論することを通して地域文化と景観を研究する視座や方法などを学んでいます。また、休日を利用したエクスカージョンやゼミ旅行で調査方法などを実地に指導しています。

●受験生に対するアドバイス

歴史の研究とは、古文書や古地図・絵図などを各自の歴史観から読解して過去の物語を紡ぎ、過去の経験から未来を切り開く術を学ぶことです。豊かで客観的な歴史観を養うためには、激動する現代社会にも幅広い関心を持ち続けることが必要です。勉強の合間に新聞や本を読み、テレビのニュースやドキュメンタリー番組を観る習慣をつけましょう。

よしだ としひろ
吉田敏弘

■歴史地理学、地図史



私のゼミでは、絵図・古地図の分析や伝統的景観の分析と保全の実践を中心に、学習している。特に景観保全では、岩手県一関市本寺地区の景観保全活動を支援し、この村内に今も残る小区画水田の復田と無農薬による米栽培に取り組み、ゼミ生有志が年に二度、田植えと収穫の体験で現地を訪問、地域住民との交流を実施している。さらにスキル教育として地理情報システムGISを導入し、学生にPC上での空間情報処理の基礎を指導して、さまざまな活用を図っている。

歴史地理学は、現代社会が抱える問題と向き合うことが重要だ。過去の地域の様相を復元し、過去から現代に至る地域の変化の実証的な解明を通じて、景観・環境保全や災害・防災といった現代の地域問題に貢献することができる。狭い教室に閉じこもることなく、国内や国外に足を向け、さまざまな地域に暮らす人々の姿をしっかりと目に焼き付けたい。私はそうした意欲と情熱をもった学生を歓迎する。学生時代にしか体験できないことを大切にしよう。



博物館学

うちかわ たかし
内川隆志

■博物館学



國學院大學大学には昭和3年に樋口清之博士によって創設された考古学標本室が起源となる國學院大學博物館があります。物質文化を研究する考古学を学ぶため多くの実物資料を直接見ることが出来る博物館の必要性を訴えての開館でした。それから80年、平成20年にリニューアルオープンし、20名に及ぶ専門スタッフによって特別展やワークショップの開催など日夜積極的な博物館活動を展開し、全国にその名が知られるようになりました。皆さんはそんな恵まれた環境で人文系学芸員としての博物館の専門的な知識と技術を習得できるのです。

博物館学は、人類が遠い過去から現在に至って築いてきた様々な生活文化の証を探求し、その成果から未来の新しい人間の生き様を学習するための殿堂である博物館を、より良き存在として科学的に達成するための学問として存在します。学芸員は博物館学の専門知識・技術、各々が身につけた専門分野における知識をフル活動させ、博物館という場で様々なかたちで社会に発信する専門職といえます。モノと人、人と人をつなぐ学芸員の世界を目指してみませんか。



教職課程

さわだこういち
澤田浩一

■社会科教育
公民科教育
道徳教育史



中学校及び高等学校の教員を目指す皆さんが、教職に従事していくために必要

とされる資質・能力を身につけるための科目を担当しています。まず、現代の学校教育に関する基礎的な知識とその課題を理解することから始めます。上級生ともなれば、皆さん自身が仲間と切磋琢磨しながら、実際に中学校特別の教科道徳、中学校社会科や高等学校公民科の授業を自ら構想し、学習指導案を作成することができるようになることを目指しています。

私は高等学校の地理歴史科及び公民科の教員として長年勤務した後、国立教育政策研究所において、中学校と高等学校の道徳教育並びに高等学校の公民科教育を中心に教育課程の調査研究に従事してきました。現在は、主に中学校道徳の教育内容や教材の変遷について調べています。それらと中学校及び高等学校の社会科系諸科目の学習内容との関連についても調べています。

たわだまりこ
多和田真理子

■社会科教育
教育学
日本教育史



私は主に、教員を目指すみなさんが修得する教職課程の科目を担当します。担当科目のひとつ「教育の原理」は、「あなたにとっての教育とはどういうものですか？」という問いかけから始まります。何かひとつの正解に行き着くわけではありません。究極の答えが見つからない問いの深みと、その深みを味わう楽しさを共有したいと思っています。

私が研究しているのは、日本の近代教育史です。学校や役場に残されている文書、昔の教育者たちが書いた記録などを読み解くのですが、知りたいのは、さまざまな時代を生きたそれぞれの人々にとって「教育」とはどのようなものであったか、何を学び、教えようとしたのか、教育を受けることで何が得られると期待したのか、ということです。私たち自身が経験し、またイメージしている「教育」とは、古今の数知れない人々が営んできた「教える」「学ぶ」の積み重ねで成り立っています。そう思うと、史料を読んで多様な教育観にふれることは、まさに「教育とは何か」という問いの深みを味わう楽しさそのもの、なのです。

國學院大學

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

発行:2021年3月25日

史学科へのお問い合わせ窓口

[文学部資料室] 電話:03-5466-0246

実証主義。

歴史は史資料からしか、語れない

表紙写真：鉄黒漆塗紺糸威異製最上胴具足 伝上杉景勝所用（新潟県立歴史博物館所蔵）
14頁写真：陸奥国骨寺絵図 鎌倉時代（東京大学史料編纂所所蔵模本）
裏表紙写真：火焰型土器 新潟県岩野原遺跡出土 縄文時代中期（國學院大學博物館所蔵）



KOKUGAKUIN
UNIVERSITY
140th
1882-2022